随想

淑徳ファミリーを生きて

愛知淑徳中学校
英語科教諭
遠山 勝則

1998年(平成10年)に入職し、21年が経った。淑徳ファミリーという言葉が、私の就職当時よく言われた。教員間の結束、生徒と教師、保護者との信頼関係。教員間、とりわけ、先輩と後輩、同輩とのつながりから学ぶものは、これまでの私の宝となった。豪放磊落な先輩方が多かった。宮沢邦彦先生、後藤康夫先生、牧亮先生などがそうだ。学校とは常識を教えるところだと思っていたのだが、私が考える常識というのは、私のフィルターを通したごく限られたものであり、破天荒な先輩方に勇気を頂くことが多かった。

井上勇先生を筆頭に、井上旅行と銘打って一族郎党のように親しく旅をご一緒する先輩方にも恵まれた。この先生方には、私の結婚披露宴にも足を運んで頂いた。その際には、家内の高校時代の担任であった佐藤干城先生、豊島忠先生にも祝福を頂いた。

私が病気休職の際には、駅から遠く離れた私の実家まで豊島先生は歩いてお越しいただいた。家族は感激していた。また、後藤先生からは激励とも何とも言えないユーモアに溢れた電話で、家族は不安から安心を頂いた。

病気がちであった私のことも考えてか、家内は齢40を過ぎてから看護師になった。淑徳魂に溢れる陰徳の心を持った、淑徳ファミリーの構成員の一人である。家内は高校、大学と7年間、淑徳に育ててもらった。

今日もまた桜ケ丘の高台の校地には、同僚、生徒の声が響いている。父母を交えた淑徳ファミリーという紐帯で結ばれている。これまで頂いた数々のご恩をどれだけ返すことができるか、それが今後の私の仕事だろう。